



バックナンバーや屋久島国有林における入林申請等はこちら
https://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/



鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1

TEL 0997-42-0331



令和6年度 屋久島世界遺産地域連絡会議開催 (5月20日)

屋久島町議場にて、令和6年度屋久島世界遺産地域連絡会議が開催され、①5年度の事業実績及び6年度の主な事業計画、②世界遺産地域管理計画の改定、③世界遺産地域モニタリング計画の改定、④湿原保全対策、⑤世界遺産登録30周年事業の報告等について、各機関から説明がありました。

九州森林管理局からは、令和5年度の事業結果及び6年度の主な事業計画、湿原保全対策等について説明を行い、特に湿原保全対策において局所的に浸食が進んでいる流路の浸食防止対策等を実施した結果について報告を行いました。また、各委員からは、管理者不在の登山道や遺産地域管理計画書についての意見等が出され、活発な意見・情報



会議の様子

交換の場となり会議を終了しました。九州森林管理局としては、引き続き関係機関と連携・協力し取組を進めることとしています。

令和6年度 屋久島世界自然遺産地域等のモニタリング調査概要

屋久島森林生態系保全センター及び九州森林管理局で実施する令和6年度のモニタリング調査の概要についてお知らせします。特に本年度は、湿原保全対策に基づき保全対策実施計画書の作成に向け進めることとしています。

【目的】世界自然遺産に登録された屋久島の森林生態系を適切に把握し、科学的なデータに基づいた順応的管理を行っていく必要があります。このため、平成11年度から実施している垂直方向の植生調査を引き続き実施するほか、各種モニタリング調査を行い、学識経験者等の意見を聴きながら効果的な遺産地域の保護・保管理に資することとしています。

【業務概要】

①屋久島西部地域の垂直方向の植生モニタリング調査 標高0m地点から国割岳山頂付近の標高1,300地点まで、おおよそ標高200mごとに設置した8か所のプロットで調査を行い過去のデータと比較・分析し、動態予測を行います。

②湿原の植生状況調査、保全対策実施計画書の作成等 小花之江河に設置した植生保護柵内外の状況調査を行います。また、花之江河における水

の収支、試行的保全対策箇所の土砂・枝葉等の堆積状況、希少種の状況確認などを行います。特に今後の対策に不可欠な保全対策実施計画書の作成に向け環境省と連携し取組を強化することとしています。

③西部地域のヤクタネゴヨウ生育状況調査

ヤクタネゴヨウ群落のプロット箇所において個体の生育状況等の確認調査を行い評価します。

④森林生態系における気候変動の影響モニタリング調査 気象庁及び鹿児島県のデータ、当保全センターのデータ収集を行い分析評価します。



小花之江河 植生保護柵



西部地域 垂直分布

令和6年度 GW期間中の縄文杉周辺マナー指導を実施（4月30日）

4月30日（火）に屋久島山岳部保全利用協議会（※）の一員として、当保全センター職員2名屋久島森林管理署3名が縄文杉周辺にて登山客のマナー指導を実施しました。

このマナー指導はGW期間に混雑が予想される縄文杉デッキ上で、登山客のマナー遵守や順路逆走等による混雑を緩和するために実施しているもので、デッキを訪れる登山客へ順路案内やデッキ上での飲食禁止等の呼びかけを行いました。当日は、マナー指導を行った10:30~13:00の間に約280名の登山客が訪れ団体客や家族連れ等で賑わっていました。登山客はマナーを遵守し鑑賞を楽しんでいました。今後さらに国内のみならず、国外からの登山客が増加することが考えられるので、安全で快適な登山ができるよう関係機関との連携や定期的なパトロールに努めることとしています。



登山客で賑わう北デッキ

※環境省・鹿児島県・屋久島町・屋久島観光協会・屋久島環境文化財団・林野庁等で構成されている協議会

湿原のモニタリング調査（5月21日）



花之江河 現地調査

花之江河と小花之江河において、九州森林管理局計画課、当保全センター及び調査の業務受託者合同で、

①令和5年度に試行的に実施した対策箇所、②地下水位計の増設箇所、③祠土台部分の浸食対策、④東側流路の分散対策、⑤L字型木道の撤去、⑥木道等の付け替えルート候補地の選定等について、現地の状況を確認し、今後の保全対策について共有しました。令和5年度試行的に実施した堰（枯れ枝等を結束した簡易的なせき）については、各堰とも枝条や枯葉等が堆積しており、浸食防止対策につながっているようです。

シャクナゲパトロールの実施（5月22日~6月4日）

屋久島森林管理署と当保全センターでは、例年登山者が多くなる5月下旬から6月上旬のシャクナゲ開花時期に合わせ、高山植物の盗掘防止と登山客のマナー向上を目的に森林パトロールを実施しています。

1. 宮之浦岳コース 初めて環境省屋久島自然保護官事務所と共同で実施しました。天候にも恵まれたため、50名を超える登山者（内宿泊者13名）がおり、マナー等に関しても問題なく登山をしていました。ヤクシマシャクナゲは多少つぼみを見ることができましたが、ほとんど咲き終わりに近い状況でした。看板や階段の崩壊箇所を環境省職員と確認し、簡易な登山道の補修も行いました。

2. 黒味岳コース 2日間実施し、両日とも天候に恵まれたこともあり、30名以上の登山者を確認することができました。登山者による林内でのガスバーナーの使用が見られました。林野火災に繋がる可能性があるため、落ち葉が多く堆積、または、樹木が頭上を覆っているところでの使用はお控えください。また、乾燥時期のガスバーナーの使用は特に注意をお願いします。

3. 永田岳コース 霧が立ち込め、時折降雨もあった中のパトロールとなり、登山者も1名と少ない状況でした。ヤクシマシャクナゲは、ピークを過ぎてはいたものの満開に近い状態で咲いていました。高山植物の盗掘等のマナー違反も見受けられませんでした。



職員によるパトロール



ヤクシマシャクナゲ

＜登山者の皆様へ＞ 植物や環境保全のため、樹皮を剥ぐ・採取をするといった植物を傷つけること、歩道から外れることのないよう、また、ごみは必ず持ち帰ること、トイレは決まった場所ですること、携帯トイレを携行することにご協力をお願い致します。なお、植物等に異変を発見した場合は当保全センターへご連絡をお願い致します。

「ヤクスギ林固定試験地より」 ③二人だけの小径

高嶋 敦史 (琉球大学農学部 与那フィールド 准教授)

今回紹介するのは「二人だけの小径」固定試験地です。「小花山」や「天文の森」と同様に、1973年にヤクスギランド内に設定されました。沢津橋の南側から西方向に延びていた「二人だけの小径」という歩道の奥、標高1,050m付近に位置しますが、この歩道は廃道になってからすでに長い時間が経過して危険なため、現在は一般の入林者の立ち入りが禁止されています。

1.0ha (100m×100m) の試験地は、北東向きのやや急な斜面の中腹から下部にかけて設定され、最高点と最低点の標高差は60mを超えます。試験地の中央付近は直線的に沢が流れ下り、岩が露出しています。そのあたりでは高木の密度も低く、林冠が開けている周辺ではちらほらスギ若齢木の定着も見られます。ただし、北東向き斜面ということで、林床に広く日光が当たるようなイメージではありません。

試験地内の樹木の測定は、1973、1991、2002、2013年に実施されています。その結果、スギ全体の本数密度はそれほど低くないものの、胸高直径が110cmを超える太いスギの密度は小花山や天文の森などと比べて低いことが明らかになりました。また、別途実施された切株の調査では、スギ切株の本数密度が他の試験地の半分ほどしかなく、特に太い切株の密度は大幅に低いことが明らかになりました。これの結果から、二人だけの小径試験地は江戸時代頃の伐採以前から太いスギの密度が低く、当時伐採されたスギの本数も比較的少なかったと考えられます。

このことは、試験地内の傾斜が全体的に急であることに起因する可能性があります。九州大学の大学院生だった牛島伸一さんらは、試験地内のスギ切株から年輪サンプルを採取して、切株となったスギが生育していた年代を推定しました。その結果、傾斜が急な斜面上部には西暦1,300年以降に発生したスギの切株がまとまっているのに対し、斜面下部の一角の緩傾斜地には西暦1,300年



二人だけの小径（左下）が描かれていた古い案内板



斜面での調査（中央は吉田茂二郎先生）

以前から定着していたスギの切株がまとまっていると報告しています。前者にあたる傾斜が急な斜面上部は、西暦1,300年ごろに、スギの一斉更新につながる斜面崩壊のような出来事が発生したと考えるのが妥当かもしれません。

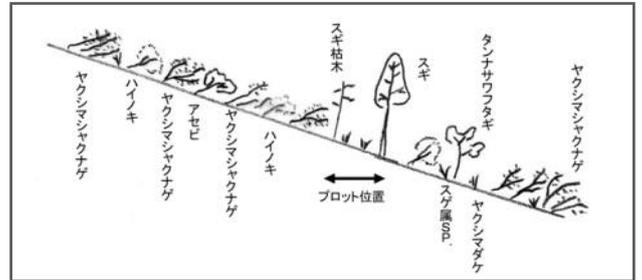
また、試験地内のスギ以外の樹種構成は、サクラツツジをはじめ、シキミ、サカキ、ハイノキといった低木・亜高木の本数密度が高くなっていて、胸高直径4cm以上の測定対象幹は2,000本を超えています。傾斜が急なこともあって、調査がやや大変な試験地となっています。



屋久島中央部地域の垂直方向の植生モニタリング調査（令和4年度）

[標高1600mプロット(第二展望台直下)] 確認種数：45種(平成29年度：47種)

調査結果の概要 スギが優占し、ヒメシャラ等が混交する針広混交林である。風衝により樹高が15mを越す個体は見られない。亜高木層・低木層にはヤクシマシャクナゲが圧倒して多く、特にこの5年で大幅に増加した。林内は耐陰性の高いハイノキ、アセビ、スゲ属sp. が優占し、乾燥化が進行している。スゲ属sp. にはシカの食痕が多数見られる。シカ食害の影響を強く受けた林相で、植生の単純化が懸念される。

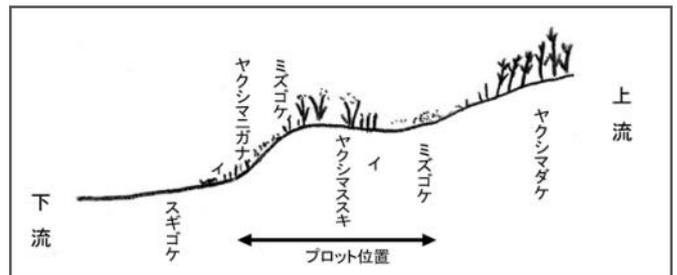


標高 1600mプロットの森林概況

標高 1600mプロットの群落縦断面図

[標高1775mプロット(焼野三叉路付近)] 確認種数：14種(平成29年度：16種)

調査結果の概要 イボミズゴケ群落が優占する湿地である。ヤクシマダケの被度がやや増加して点在し、イボミズゴケはわずかに減少している。砂礫の堆積箇所には植生が見られず、シカの足跡と糞が見られる。また、シカの食害を受けたハリコウガイゼキショウが目立つ。プロット外の砂礫の影響を受けない傾斜部にはプロット内で未確認の植物が見られ、周辺はヤクシマシャクナゲ群落が見られる。ヤクシマダケの被度の増加、砂礫の流入の増加、シカの食害及び踏圧が懸念される。



H19(15年前)の遠景

R4(本年度)の遠景

標高 1775mプロットの群落縦断面図

グリーンサポートスタッフ(GSS)巡視記録より ～花と景色～

ヤクシマシャクナゲ

ヤクシマシャクナゲは5月31日、宮之浦岳までのパトロール中、投石平（標高約1700m）で見かけました。

屋久島では山の神様の花とされ、古くは岳参りの手土産としてその蕾（つぼみ）を持ち帰ったとのこと。今年は花のつきが多く、また例年より満開の時期も早かったようです。

